

## 松竹第一主義 松竹映画の100年 Shochiku Cinema at 100

会場:長瀬記念ホール OZU/会期:2020年7月7日(火)–9月6日(日)

長瀬記念ホール OZUでは、2020年7月7日から9月6日まで、特集上映「松竹第一主義 松竹映画の100年」を開催する。松竹映画100年の長大な歴史を、サイレント期から21世紀の作品まで、計64プログラム(79本)にまとめるものである。今号では、本特集の開催に合わせて、公開当時に社会現象を巻き起こし、1950年代の松竹映画を代表するヒットシリーズとなった『君の名は』三部作(1953–54年)について、映画研究者の河野真理江氏に、その実態を最新の研究成果と共に論じていただいた。また当館主任研究員の大澤浄が、戦後の松竹京都を支えた大曾根辰夫監督について論じている。

### 『君の名は』とは何か ブームの実態とアクチュアルな観客 河野真理江

Marie Kono

「キミノナハ」と聞けば、すっかり『君の名は。』ってしまっただが、一昔前までは、その名は偏に(新海誠監督、2016年)が想起される時代にな 戦後における『君の名は』三部作(大庭秀雄監督、

1953-54年)のことを指していた。

菊田一夫脚本のラジオドラマを映画化したこの作品は、ラジオ放送中に第一部と第二部が封切られ、さらにその間に小説が出版されるなど、徹底したメディアミックスを通じて売り出され、全国の放送局を出演者が来訪するキャンペーンや、今で言うところの「聖地巡礼」のようなロケ地巡りツアー<sup>2</sup>、全国から3万人が応募したミス・コンテストの開催なども行われた。そうした映画化の前後を含めたイベントも含め、まさにブームと呼ぶにふさわしい社会現象を巻き起こし、その伝説的な大ヒットは長きにわたって語り継がれてきた。

もちろんこの現象の背後には、製作会社の周到な計画があった。1952年にラジオドラマ「君の名は」が最高聴取率を記録した時点でいち早く映画化権を獲得した松竹は、本作を『愛染かつら』(野村浩将監督、1938-39年)以来の「大メロドラマ」とすべく、企画段階から大掛かりな観客調査を実施している。1953年5月には「希望配役及び希望場面」の懸賞募集を行い、応募者が「地域分布に関しては全国くまなく分散している事」、「女性がその七割を占め、若い層(二十五歳以下)が殊に多い」というデータを得た。第一部の撮影がクランクインした7月13日には、宣伝浸透度の測定のために、映画館での面接調査も実施した<sup>3</sup>。

松竹はこうして若い女性をターゲットとした宣伝対策を徹底し、9月15日に満を持して第一部を公開したのである。さらに第一部公開中には、観客がどの場面で感動しているのかを、心理反応アナライザーを用いて測定する試みも行われ、この科学的な調査を通じて得られた結果(クローズアップが効果的であることなど)は第二部、第三部の製作に活かされた<sup>4</sup>。

一方で、シリーズを通してこの映画は、「いいところの少しもない作品<sup>5</sup>」、「こういう作品に対して正面から芸術的文句をつけるのも、実は馬鹿馬鹿しい<sup>6</sup>」、「第一部もつまらぬものであったが、はっきり言って第二部は更につまらない。(中略)終始めそめそとじめじめとして暗い<sup>7</sup>」「もっとも拙劣なお涙頂戴劇<sup>8</sup>」、と言った具合に、散々に批評家たちの酷評を買った。そのほとんどは批評に値しないというような呆れ気味の論調のものであったが、この作品に潜在する特質

を分析し、これを深刻に憂いた瓜生忠夫のような批評家もいた。

忍だ、忍だ、これは——とぼくは思った。真知子も春樹も、あの天皇制が要求した忍従の美德のなかに生きている。(中略)この映画は空襲下の数寄屋橋からはじまっているのに、登場人物は一人として、あの大戦争も敗戦もくぐりぬけてはいないのだった。(中略)どんな理不尽をも犠牲をも忍耐し、その辛さを涙で慰めることを教えたのであった<sup>9</sup>

出会いと別れを繰り返しつつける真知子と春樹のすれ違いの恋愛劇を延々と見せつけられるという点では、なるほどこのメロドラマは、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ」戦中の集団心理を反復するような不気味なマゾヒズムを漂わせている<sup>10</sup>。

『君の名は』ブームにおいて興味深いのは、どうしてそんな事態が起こっているのかということが、一つの大きな謎として、階級や通俗性をめぐる真摯な議論を少なからず呼び起こした点にある<sup>11</sup>。批評家に総スカンを食らったこの映画は確かに興行的に大当たりしたのであり、『映画の友』が実施した1953年度の日本映画ベスト・ワンに関する世論調査でも、『東京物語』(1位)、『にごりえ』(2位)、『雨月物語』(4位)などの押しも押されぬ「名作」につづいて、9位に『君の名は(第一部)』がランクインしている。記者はこの結果に戸惑ったのか、「あえてベスト・ワン映画に推すだけのものを持っているだろうか<sup>12</sup>」と解説中でわざわざ苦言を呈している。『群像』の依頼で第二部を観た文芸評論家の佐々木基一も、なぜこれがウケているのか「実を言うとそれがよく分らなかった」と率直な感想を記している。佐々木は事前に週刊誌等から、劇場でどよめきやため息、嗚咽の音が聞こえてくるとの情報を得ていたため、「どんなにぞろぞろと起るか、と、多少期待して」いたらしいのだが、彼が足を運んだ劇場では「みんな静かに、表情なくしまいまで観ていたという<sup>13</sup>」。

では、本作のターゲットとされた当の女性観客たちは、どのようにこの作品を受け止めてい

たのか。資料は決して多くないが、貴重な座談会の様子を収めた記事が手元に二つある。

一つは、文筆家の阿部艶子が司会となり、既婚女性3名と独身女性2名に、独身男性2名が加わる計8名で、『婦人生活』の誌上で開催されたものがある<sup>14</sup>。参加者の女性たちはここで、とくに本作のヒロイン真知子について忌憚のない意見を交わしている。ある主婦は、「女の私が見ていても真知子が頼りなくてしょうがなかった。腹が立つようで…」と語り、ファッションモデルの女性も「あの真知子にはユーモラスなセンスが全然欠けているんですね」とやはり手厳しいことを言っている。結局、司会の阿部は、「やっぱり真知子が結婚しなければ一番よかったですよ」と、それを言っちゃあおしまいよ、という発言でこの話題を締めくくっている<sup>15</sup>。

もう一つは、『スポーツニッポン』が企画したもので、主婦、学生、会社員、ホステスの4名の女性が参加している<sup>16</sup>。ここでは、ホステスの女性が鋭い視点で本作の登場人物のイメージに切り込み、「勝って人物の分析なんですけど、典型的な現代派ね。気が弱くて春樹に対するインフェリオリティ・コンプレックスをいつも抱いている男」、「第二部で初めて登場するアイヌ娘のユミ、北原三枝さんの野生的な持味がピチピチしているようで、あの場面だけは私も春樹と真知子の存在を忘れました<sup>17</sup>」などと発言している。

二つの座談会で、『君の名は』を観て、感動した、泣いた、と語った女性は意外なことに一人もいない。むしろ彼女たちは冷静に作品を批判し、大ヒットという現象についても俯瞰的に捉えていた。

本作のヒロイン真知子は少なくとも誰からも共感を得るといったタイプのキャラクターではなく、演じた岸恵子でさえ、「真知子という女性はつかみどころがないわね、この人が人間かしらと思うくらい……わがままで決して『純情な女』なんかじゃないと思うの、もちろん自分が苦しむだけ真知子にも苦しめという勝則も悪いけど、一たん嫁いでしまった以上、あんな行動に出るのはわからない<sup>18</sup>」と述べていた。にもかかわらずスクリーンに映る彼女のイメージは、「真知子巻き」を流行らせる程度には女性たちの憧れの的となり、生ま

れた子に「真知子」と名付ける親をも生み出した。

しかし、観ることの経験は本来、個別的であり、アクチュアルな観客の反応は多様である。男女の別を問わず、『君の名は』は誰かを泣かせ<sup>19</sup>、そうでなければ何かを語らせ、何らかの行動へと駆り立てもした。なんであれブームの実態とはこのように多層的なものであるが、『君の名は』をめぐる観客の経験はとりわけ、涙する女性観客という記憶と結びつけられてきたと言える。

さて、『君の名は』は、たとえば『二十四の瞳』(木下恵介監督、1954年)のように、今もなお泣ける映画でありつづけているだろうか？ 俳優たちの過剰な身ぶりや次から次へと襲い掛かる難事の連続は、現在の観客にとっては涙よりも笑いを誘うものであるかもしれない。だが、まさにこのとき、本作に熱狂した名もなき戦後の観客たちの遠い記憶は、観る者の心に不穏な戸惑いを残すことだろう。

【

映画研究者)

#### 註

- 横濱雄二「メロドラマと帝国——『君の名は』研究」『層 映像と表現』創刊号(北海道大学大学院文学研究科映像・表現文化論講座、ゆまに書房、2007年)207頁。
- 横濱雄二「メディアイベントとしての『君の名は』と『君の名は。』」(『地域×アニメ コンテンツツーリズムからの展開』地域コンテンツ研究会編、成山堂、2019年)106-109頁。
- 松竹本社調査室「『君の名は』の総合調査」『キネマ旬報』1953年10月下旬号、89頁。
- 「松竹が観客心理を分析 君の名はについて」『毎日新聞』1953年9月24日夕刊。
- 「新映画」『朝日新聞』1953年9月18日夕刊。署名(純)。
- 津村秀夫「ヒットした『君の名は』他」『近代映画』1953年12月号、120頁。
- 『スポーツニッポン』1953年12月8日。
- 登川直樹「日本映画批評 君の名は(第二部)」『キネマ旬報』第83号、55頁。
- 瓜生忠夫『日本の映画』(岩波新書、1956年)90-92頁。
- 『君の名は』とマゾヒズムとの関連については、拙論「『君の名は』(1953-1954)論——戦後のメロドラマの感傷性と通俗性」『ヤミ市』文化論(井川充雄・石川巧・中村秀之編、ひつじ書房、2017年)282-310頁を参照されたい。
- 拙論「『君の名は』と戦後日本のすれ違い映画——ジャンルの形成と特質」『映画学』28号(2014年)46-55頁。
- 「一九五三年度世論調査発表」『映画の友』1954年5月号、123頁。
- 佐々木基一「『君の名は』についての架空演説」『群像』1954年2月号、190-192頁。
- 「人妻の恋愛を語る！」『婦人生活』1954年1月号、216-224頁。
- 真知子の夫勝則についても、声優の女性が「私、あいう夫だったら絶対いやす」と扱き下ろしている。同上、222頁。
- 「身近に感ぜられる物語 立派過ぎた春樹」『スポーツニッポン』1953年12月5日、4頁。
- 『君の名は』におけるアイヌの表象をめぐる政治的力学については、横濱「メロドラマと帝国」のほか、拙論「『君の名は』と戦後日本のすれ違い映画」を参照されたい。
- 『スポーツニッポン』1953年11月16日。
- 公開から約30年後、映画批評家の佐藤忠男は「いくつかのヤマ場の濃さに、私は大いに泣いたものだった」と告白している。佐藤忠男「感傷的メロドラマの頂点として」『朝日ジャーナル』1983年12月号、37頁。